

“対話”が生む力

クリニカル ポイント

トピック

カルチャー

Medical Square

“対話”が生む力 —カフェという支援のかたち—

Vol.3 おんころカフェ

File No.174 エンドオブライフを生きる哲学対話 49(477)

一般社団法人 哲学相談 おんころ 代表理事 中岡 成文

REPORT “自分の言葉で答えを探す” ためのカフェ
～おんころカフェ～ 53(481)

編集部

がんや難病を抱えた患者さんや治療を終えた患者さん、そのご家族や医療者が同じテーブルにつき、お茶を飲みながら語りあう「カフェ」形式の支援活動が全国に広がっている。立場を超えた“対話”がもたらす力について、医療者により立ち上げられた、あるいは医療者が参加するさまざまなカフェを通して考えてみたい (Vol.1「がん哲学外来 メディカルカフェ」は本誌67巻8号, Vol.2「就労支援カフェ in いしのまき/がん哲学外来 日和山カフェ」は本誌67巻12号に掲載)。

今回は、大阪を拠点に東京でも定期的開催されている哲学カフェ「おんころカフェ」を取り上げる。代表を務める元大阪大学大学院教授の中岡成文氏は、問題が発生している場へ赴き、現場の多様な言葉を引き出して、当事者たちが自分で問題を認識し、解きほぐすことを促す「臨床哲学」に長年取り組んでこられた哲学者である。中岡氏が中心となって2016年に立ち上げた「おんころカフェ」は、「哲学対話」で患者さんやご家族を支援するという趣旨のカフェであり、医療者にも参加を呼びかけている。

「哲学対話」とは何か？ 患者会や患者サロンでの「会話」とは何が違うのか？ 医療とのかかわりも深い中岡氏に、「哲学対話」について、また「哲学対話」を患者さんやご家族の支援に用いる意義、対話の場で医療者に期待する役割などについてご執筆いただいた。

併せて約半年にわたって参加・取材をさせていただいた「おんころカフェ」のリポートを掲載。実際に参加することで「哲学対話」のさまざまな面白さを感じたが、そのいちばんの魅力は進行役のもと、「聴くこと」と「言葉にすること」を丁寧にくり返すなかで、“知らなかった自分”と出会うことにある。受け入れることの難しい状況と向き合わなければならなくなったとき、支えとなり、力となってくれるのは、そんな“知らなかった自分”なのかもしれない。

エンドオブライフを生きる 哲学対話

File No.174

“対話”が生む力

クリニカル ポイント

トピック

カルチャー

Medical Square

一般社団法人 哲学相談 おんころ 代表理事

中岡 成文

はじめに 哲学にも「プラクティス」がある

医学・医療はすぐれて専門性を誇る領域だが、うちに閉じている社会的な役割を果たせない。たとえば、政策や法制については行政や法の専門家、医療経済については経済の専門家などに相談するだろう。では、患者の「こころ」への対応については？ ソーシャルワーカーか、あるいは臨床心理士か？ 欧米には「哲学プラクティス(ないしカウンセリング)」(philosophical practice) という分野があるのをご存じだろうか。哲学にも、医療や心理のような「実践」「臨床」があるということだ。そして、行きづまった人生や社会の問題を主として対話やカウンセリングを通してときほぐす。

20年ほどまえ、大阪大学で「臨床哲学」という新しい哲学を始め、医療・看護と教育が二本柱だった。書齋や大学に閉じこもらず、「社会の現場に出よう」というねらいで、一種の「リエゾン哲学」だったかもしれない。同じ時期、やはり哲学を社会の現実や人々の悩みに結びつけ、心のケア相談や企業研修に乗りだした欧米の哲学プラクティスを知り、日本(とくに大阪)でも哲学対話を始めた。今では日本全国に哲学カフェは広まっているが、その先鞭は臨床哲学がつけた。ホスピス運動にかかわって、日本ホスピス・在宅ケア

研究会の大会で臨床哲学のメンバーが哲学カフェを開くようになったのも、同じころだ。私は、外科を開業していた父を、胃がんでなくしたばかりだった。また、その後、共に臨床哲学と哲学対話を探究していたメンバー(看護師・看護学研究者)をがんで失うという、無念なことも起こった。

テーマと進行役をもつ対話

大学の仕事を離れた後、「おんころカフェ」という、がんや難病の患者・家族の方や医療者との哲学対話を2016年5月に開始した。大阪大学医学部附属病院にお世話になり月2回のペースで、また東京でもほぼ定期的に行っている。「おんころ」というネーミングはオンコロジーに由来するが、がんという疾病には限らない。ALSの患者さんと定期的に対話してきた経験をもとに、神経難病の当事者にも門戸は開いているし、将来的には他の「死を意識せざるを得ない病」も視野に入れている。つまり、エンドオブライフ、いわゆる人生の最終段階を見据えた対話であるが、「エンド」には目的・目標という意味もあり、「究極の生き方」を探求しているとも言える。

哲学対話とか哲学カフェといっても、行ったことないし、具体的にどんなことをするのか知らないという方も多いだろう。おしゃべり会やがんサロンとどこが違うんですかとい

う質問もよくもらう。じっさいにどこかで対話に参加して、面白さを体験してもらうのが一番だが、「テーマ」と「進行役」がポイントかなと思う。哲学といっても、専門用語はいっさい必要なく、ひとりの進行役のもとで、ひとつのテーマを掘り下げて話し合ひましょう、ということだ。

最近では、「根っここと翼」というテーマでおんころカフェをやった。これは美智子皇后のスピーチ「子供の本を通しての平和」にヒントを得て、私たちのアイデンティティの問題を取り上げている。病気とは関係ない？ そう、がんや難病の患者さんたちには自分の病気からしばらく目を遠ざけてもらいたいのだが（「距離」を置くことは大切なので）、それでも一瞬たりとも忘れることのできない病気体験にどうしても思いは返って来ちゃう。ただ、少し距離を置いたことで、自分らしさの危機、生きがいの再構築などについて、多少とも前向きに語り始めることになる。

また、経験ある進行役（哲学者やそれに準ずる人）の存在も、重要だ。参加者が自分の言葉を見つけて発言し、お互いに耳を傾ける。それを和やかに、リズムよく進めて、テーマの理解と気づきを深めていく。それには、進行役のスキルが要る（傾聴、人間理解、介入しないようできて巧みに介入するバランス感覚）。スルーされそうな発言のどこかに



ある日のおんころカフェ

フォーカスして、そこにみんなの注意を促すこともよくやる。また、私の場合、「おんころのたね」と称するミニレクチャーを対話の前に設けて、参加者の気分や発想に働きかける。きっかけは音楽でもいい。参加者が愛するフォーク・ミュージックのCDを聴いて、対話したこともある。

医療者は「対話」に慣れてほしい

哲学対話は医学の臨床でも使えるはずだし、ぜひ使ってほしい。大阪では、臨床哲学のメンバーが協力して、いくつかの医療機関で臨床倫理事例検討会を「対話」形式で運営したこともある。私がかかわったケースでは、「倫理カフェ」と呼んでいた。多職種のスタッフが一堂に会し、部門の利害や理屈を超えてひとつの事例と一緒に検討することは、大きな意味がある。それを外部の人間（「哲学者」）が進行することで、効果はさらに大きくなる。医療者ばかりでは、目が専門的（医療的）解決にだけ向きがちで、それが患者・家族にとってどんな意味をもつか、社会にはどう見えるかに気づきにくい。「倫理カフェ」の場合、最初の月の集まりでは事例の医療的側面が議論の中心になった（いわゆる「事例検討」）。しかし、次の月には、各参加者がひとりの「人間」「生活者」「家庭人」の目を取り戻して、同じ事例を別の側面から見直すのだ。医療者が社会的責任を果たすための第一歩として大切なことだと思う。

ある患者さんは、「医師はことばが貧しすぎる」と言った。医学教育でコミュニケーションの重要性は認識されているはずなのだが、何が足りないのだろう。クライアントへの接遇というスタンスや、病者への共感の姿勢は大切だが、社会のなかで働く他の職業と同じく、複数の活動主体（患者・家族、同僚、多職種、行政、地域、社会）の間で自分の考えを述べ、耳を傾け、対立点については

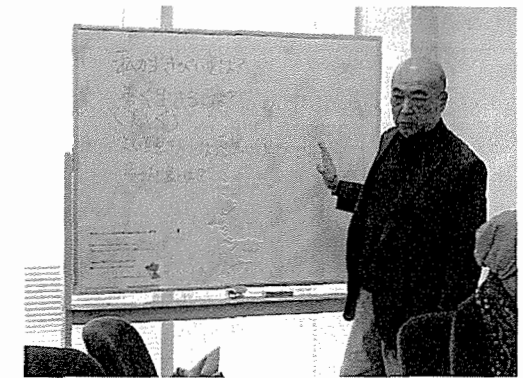
調整し合う余裕と能力が望まれる。別な言葉で言えば「インターフェイス」、つまり違う利害や立場の人たちが、その違いをもったまましっかりと話し合えることだと思う。

サバイバーの助けになる — 死生の対話への二一ス

もちろん、対話で病気が治るわけではない。人間は動物の一種だから、感覚的な痛みに影響されるなどというのはむりだ。その意味で医療の介入は不可欠と言える。けれど、痛みや死への不安と同じくらい、職場での責任や家庭での務めを果たせないことをつらく感じる人は少なくない。心や精神をもつ私たち人間にとって、「言葉」は薬と同じくらい必要だと思うのだが、その効果はなかなか臨床研究では実証できず、認めてもらいにくい（「笑い」には健康効果があると言われるが、それも厳密に測りがたいのと似ているだろう）。「現代社会には哲学が足りない」と思う。

なぜ、がんや難病の患者に対話が必要なのか。言うまでもないが、ひとは体とそのニーズだけではなく、精神とそのニーズももつのだ。がんや難病の衝撃的な体験をした後、自分の生き方を立て直し、セルフイメージを再構築するためには、何か納得できる「言葉」が必要なのだ。それは自分のなかや家族のなかに閉じこもっているだけでは、たぶん発見できない。哲学対話で自分と同じ病気や立場の人たち（ピア）と出会い、シリアスだが身近なテーマ、安心できる雰囲気の中で語り合うことが助けになる。結論は出さなくていい。考えを整理し、表現していくうちに、当人が自分の方向性を定める（それはセルフケアと呼べる）し、いま述べたとおりピア（仲間）同士のケアが実現する。

ある日のおんころカフェの一コマを紹介しよう（発言の趣旨を残しつつ変更を加えてある）。再度の手術を終えたばかりのAさんは、



参加者全員で話し合ってテーマを決めることも

「より大事に生きなければと思う。再発を待つだけにしたくない。今までは、家庭でも仕事でも手応えある生活をしてきたのに、いまは生きるだけの生活をしている」と語った。患者会で活動しているBさんは、「若い時にやりたくてもできなかったことがあった。手術後の自宅療養中にじっくり考えて、それを始めることにし、計画的にやっていった」と言った。どちらも「生きる」方を向いているのだが、切迫感が少し違うのだろう。Bさんの言葉は直ちにAさんに響かないにせよ、いつか心によみがえることを予想できる。Bさんはまた、「このように登り続けて、途中で絶命しても、それで終わりとは私は思えない。死後の生命というのか知らないが、そんなものはあるような気がしている」と言う。死後の生命と言われると医療者はぎょっとするかもしれないが、それは「何のために生きているのか」という根本的な問いから目をそらしているだけだ。いまの日本社会に死生にかかわる重みのある言葉が足りなさすぎるためだ。この方は別に「宗教」を語っているのでも、勧誘をしているのでもない。しっかりと生の方を向いているところが、対話のなかで見えてくる。

かと思えば、同じ対話で、ある希少がんの患者さんは、「『何のために生きているの』という問いには意味があるのか？ 自分は生ま

れたから生きてるだけだ」と突き放した。これは、「社会のなかに自分の居場所がほしい」、「意味がほしい」という当然と言えば当然の欲求から距離をとろうとしている。人間社会の意味のゲームから逃れようとしている。それは、「がんばらない」という生き方にも通じるだろう。

ある人は新たな「意味」を求め、別の人は「意味」へのこだわりをやめる。それぞれに人生の方向について迷ったり、決めたりしているこれらの発言は、世間のふつうの会話ではなかなか出せないと言われる。おんころカフェはすべてを受け入れ、それぞれの趣旨を尊重する。

おわりに —医療者のできること

では、医療者はおんころカフェでどんな役割を果たせるだろうか。外側から知識を通してがんや難病をながめ、助言を与えられる医療専門家はもちろん貴重で頼りになる。ただ、おんころカフェでは、がん・難病経験の内側に入り込んで、「私もがん・難病当事者だ」（身内ががん・難病である、自分もいつ

がん・難病になるかもしれない）と言える人、そこからフラットに患者・サバイバーと言葉を交わせる人がうれしい。「がん玄人（くろうと）」と呼ぶこともある。人生のどの地点に立っていても、私たちは死と隣り合わせだ。ライフはどこを切り取っても、広い意味でのエンドオブライフなのだ。「スピリチュアル」な次元、哲学で言えば実存的な次元、そこにふつうにかかわれる医療者であってほしい。

関連サイト

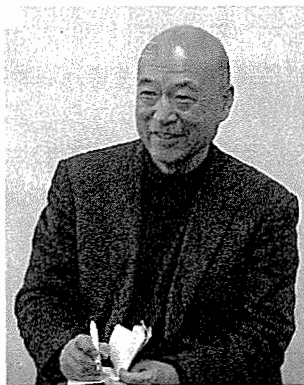
- ・一般社団法人哲学相談おんころ
<http://oncolocafe.com>
おんころカフェの運営主体。解説動画あり。
- ・大阪大学大学院文学研究科 臨床哲学研究室
<http://www.let.osaka-u.ac.jp/clph/>
哲学対話を日本で開始。研究室の刊行物から、哲学対話やホスピス運動、倫理カフェとの取り組みを調べられる。
- ・カフェフィロ
<http://cafephilo.jp/>
哲学対話推進団体。各地で開かれている哲学カフェ・哲学対話の情報を提供。

中岡成文（なかおか なりふみ）

1950年山口県岩国市生まれ

父は外科の開業医。京都大学文学部で西洋哲学を学ぶ。大阪大学大学院文学研究科教授、同医学系研究科兼任教授（医の倫理学）、国立循環器病研究センター治験審査委員会委員、先端医療センター生命倫理審議会委員などを歴任。

2014年大阪大学を退職。大阪市内の「中之島哲学広場」で市民たちと哲学の勉強会を続けるかたわら、大阪大学臨床研究審査委員会委員を務め、放送大学（大阪学習センター）客員教授でもある。



REPORT

“自分の言葉で答えを探す” ためのカフェ ～おんころカフェ～

「どうせ治らないのになぜ治療をするのか」「何のために頑張るのか」「1年の延命にどんな意味があるのか」…これらは、「哲学」の問題ではないかと思っ

ているんです——。昨日もステージ4のがん患者さんと1時間あまり話をしたという医師は、「治らない患者」と向き合うことの難しさを語り始めた。昨年12月、大阪大学医学部附属病院で開催された「おんころカフェ」でのことだ。

ここ数年、日本でも広まりつつある「哲学対話」を患者さんや家族の精神的苦痛のサポートに応用する「おんころカフェ」。「哲学対話」はどのように行われ、参加者の方々を支えているのだろうか？

（編集部）



「おんころカフェ」は、大阪大学で鷺田清一氏らと「臨床哲学」を立ち上げた中岡成文氏（元大阪大学大学院教授）らが中心となって、2016年から始めた「哲学カフェ」である（「哲学カフェ」については本誌掲載の中岡氏による「エンドオブライフを生きる哲学対話」を参照）。その名が示すとおり、がん患者さんやがんサバイバーの方を主な対象としているが、神経難病の患者さん、また患者家族や医療者にも広く参加を呼びかけ、ひと月に約2回のペースで大阪を中心に、東京でも定期的に活動を続けている。

運営に大阪大学医学部附属病院の医師らも携わっていることから、カフェは主な開催場所を同院の敷地内にある大阪大学最先端医療イノベーションセンターの会議室や院内のレストランとし、土曜日の午後や平日の夜間に

開催。参加費は無料で参加者は飲み物を持参するのみ、予約も不要だ。途中で体調が悪くなった、あるいは会話の内容やカフェの雰囲気合わない、と感じた人のために、途中退室も自由としている。

「自分の言葉で答えを探す」

「誰かの言葉で自分を納得させるのは難しいと思うんです」

そう話すのは、中岡氏と「おんころカフェ」を立ち上げた哲学対話コーディネーターの佐野桂子さんだ。かつて自分自身の“生きていくうえでの支えのようなもの”が得られればと考え、聖書について6年にわたって勉強を続けたという。しかし勉強すればするほど「何か違うな」と思うようになり、やがてその理由が、「自分じゃなくて誰かが言ってい

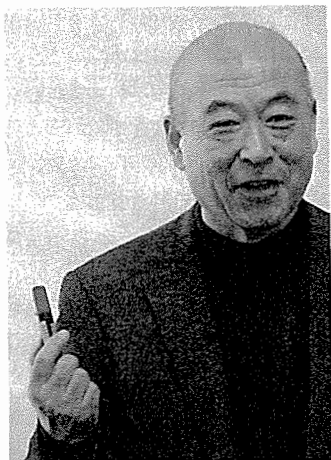
“対話”が生むカーカフェという支援のかたち

る言葉だからストンとこないんだ」ということに気づく。その後、がんを発症した父親を看取った経験から、死を意識せざるをえない病にかかった患者さんや家族の心のケアに関心を持ち、その研究のために放送大学に編入、中岡氏による哲学についての勉強会にも参加するようになる。そこで「自分の中にしか答えがない」という哲学に触れ、「自分の言葉で答えを探す」ということを患者さんにも体験してほしい」と考えた佐野さんが、中岡氏に話を持ちかけたことから「おんころカフェ」が始まった。

“自分の言葉で答えを探す”——しかし、その答えの前に立つ問いが、治癒の望めない病や死についてのものである場合、それは容易なことではない。その困難な過程を支えるために、「おんころカフェ」ではどのような対話の時間をつくっているのだろうか？

まずは「おんころのたね」から

カフェは土曜の昼下がり、大きな窓から万博公園の緑が見渡せる一室で、進行役の中岡氏が語る「おんころのたね」を全員で聴くことから始まる。さまざまなテーマについて中岡氏が考えることを簡単にまとめた文章が配られ、中岡氏の話に20分程度耳を傾ける。



中岡成文氏

病のことではなく“人間のこと”を

「さて、今の話についてでもいいですし、全く関係のないことでもいいですよ」
「たね」を語り終えた中岡氏の呼びかけで対話の時間が始まる。参加者はスタッフを入れて毎回10人前後、自己紹介を求められることはまれだが、参加者の発言を評価するのではなく、ポイントとなる言葉をすくいあ



佐野桂子さん

「何らかの刺激になって、続く対話の時間で発言しやすくなれば」という中岡氏の言葉どおり、「アイスブレイク」のような役割を果たす。テーマは毎回異なり、「耳を傾ける余裕」について、あるいはマザー・テレサの「笑ってあげなさい」という言葉や、ALS患者の「心は自由」という言葉について、など。参加者の「哲学についての知識も得たい」という声を受けて始めたとのことだが、難解なものではなく、短い時間ながら普段考えもしないようなことに思いをめぐらせたり、自分の中にはない視点に気づかされたりする。頭や心が少しずつほぐされていくのを感じる時間であり、人の話に耳を傾ける、自分の考えを言葉にするという「対話」の準備ができるように感じる時間でもある。

げることによって自発的な発言を促す中岡氏の進行で、次第にカフェは活気を帯びてくる。対話に参加する医師が、ここでは病気の相談ではなく“人間的なこと”が話題となることに意義があると指摘するとおり、話題の中心は病そのものではなく、それを含めての人間の想いだ。

休憩を挟んで1時間半、もう少し対話を楽しみたいな、という余韻を残してカフェはお開きとなる。あとはそれぞれが自分との対話を重ね、考えを深めていくことになる。

「ここは“別の世界”やからね」

「ここで話してるようなこと、ほかでは話されへんでしょ。会社の人や友達なんかと、病気のこととか、生きることとか死ぬこととか、そんな話できへんもん」

がんを発症して以来、2年あまり参加しているという男性は、「おんころカフェ」について「ここは“別の世界”やからね」と言う。日常生活の場ではもちろんのこと、患者会や患者支援のためのカフェでも「死」についての話題は避けられることが多い中で、このような場は確かに貴重だ。

「周りの人に話をしたら、“あなたの話は暗すぎる”って笑って過ごされてしまうんです」

カフェの終盤で、治療の手立てがないと告げられてからの、「死」への不安について、「人生とはなんなのか」という問いについて、

思いの丈を語った初参加の患者さんがいた。「その問いをどういう重さで受け止められるか」（中岡氏）。その言葉どおり、「おんころカフェ」では「暗すぎるから」と受け流されるようなことはもちろんない。この患者さんが、初参加ながら「死」についての深い問いを語る事ができたのも、ここでなら話せる、聴いてもらえると感じたからだろう。

さまざまなステージの患者さんが同席する場では、治療の術がなくなった方の発言は、「重すぎるのではないかと」思われるかもしれない。しかし、今の自分の状況に関係なく、生きること、死ぬことについての思いを言葉にし、聴いてもらう場、人の考えを聴くことができる場を求めている患者さんは、少なくないのではないかと。「死」についての重い問いに対しても、参加者がそれぞれの経験から考えを言葉にし、応えていたのが印象的だった。

「どれだけ考えてもいいよ、と言われたのが救いでした」

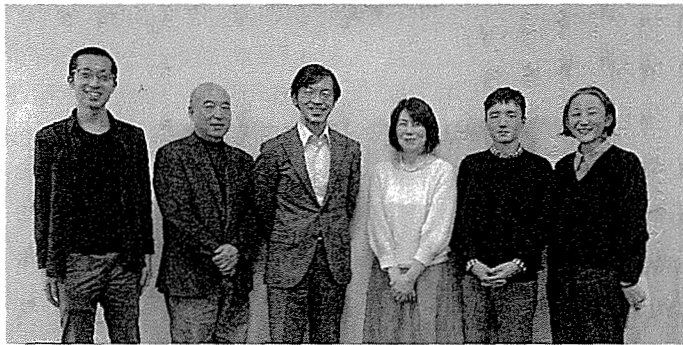
では、そのような重い「問い」に「正解」は差し出されるのか。先の「死」についての「問い」を語った患者さんは「答え」を得たのだろうか。

「おんころカフェは、結論を出してみんなで納得して終わるものではありません。いろんな人の意見を聞いて、そのプロセスを楽し



昨年12月には大阪大学医学部合奏団による音楽の演奏+カードを用いた哲学対話というクリスマスイベントを開催。中岡氏もサンタクロースに扮して進行役を務めた。(大阪大学医学部附属病院ロビーにて)





「おんころカフェ」スタッフの皆さんと、「第4回 おんころカフェ研究会」(次頁参照)で講師を務め、カフェにも参加された大阪国際がんセンター心療・緩和科部長の和田 信氏(左から3人目)
(2019年2月・大阪大学最先端医療イノベーションセンターにて)

んで、持ち帰っていただいて、今後の生活に活かしていただければ」(中岡氏)。

ある参加者の「考えすぎるなとよく言われるんですけど、ここでは“どれだけ考えてもいいよ”と言われたのが救いでした」という言葉が示すように、「おんころカフェ」はあくまでも“自分の言葉で答えを探す”場であり、自分の支えとなる言葉をみつけようとする患者さんや家族を支える場なのだ。

いろいろな人のいる中で自分の考えを言葉にするのはなかなか勇気がいることだ。でも、言葉にすることで、自分はこんなことを考えていたのか、と気づくことがある。さらに聴いてもらうこと、人の考えを聴くということをとおして、“答えを探す”プロセスの楽しさにも気づく。「おんころカフェ」はちょっと緊張感のあるカフェだが、かえってそのおかげで、ちゃんと伝わる言葉にしようと普段以上に考え、人の言葉に耳を澄ますということができるようにも思う。

ちなみに「おんころカフェ」では、東京大学大学院の法学政治学研究所で特任講師を務めるイタリア人フラヴィア・バルダリさんが、哲学対話コーディネーターとして進行役となることがあり(もちろん日本語は堪能)、また、カフェの運営を手伝う20代の臨床心

理士や大学生が対話に参加することもある。毎月のように参加されているという方の「ここはいろんな人がいらっしやるからいいなあと思って」という言葉どおり、国籍も年代も立場も異なる参加者がいるということは、さまざまな考えが聴けるということであり、ときには思いがけない発言に、カフェが大きな笑いに包まれることもある。

「考え方って、変わっていくものなんだろうな」

筆者は約半年にわたって「おんころカフェ」に参加させていただいたが、その間、初参加だった方々と二度三度と顔を合わせるようになった。

「たくさんお話が聞けて、勉強になりました。考え方って、変わっていくものなんだろうな、と思いました」

初参加の患者さんがこんな感想をもらす「おんころカフェ」。カフェでは医療者の方々にも参加を呼びかけています。診察室の中では聴けない、患者さんのナマの声を聴く機会であり、患者さんと一緒に「哲学の問題」について考える機会でもあります。先生方も一度、体験されてみませんか？

カフェへの参加・取材を快諾してくださったスタッフ、参加者の皆様に心より御礼申し上げます。

●おんころカフェ今後の開催予定●

- 4月27日(土) 14:00~ 大阪大学最先端医療イノベーションセンター2階会議室
進行役: 正置友子(絵本研究者・青山台文庫 主宰)
- 5月10日(金) 17:30~ 大阪大学医学部附属病院14階 スカイレストラン
進行役: 曾澤久仁子(国立循環器病研究センター 医学倫理研究部)
- 25日(土) 14:00~ 大阪大学最先端医療イノベーションセンター2階会議室
進行役: 中岡成文(一般社団法人哲学相談おんころ 代表理事)
13:00~ ルノアール四谷店(東京都)
進行役: 菊地建至(金沢医科大学 人間科学領域)
- 6月1日(土) 14:00~ 東京大学医学部附属病院入院棟A15階 ブルークレール精養軒
進行役: バルダリ・フラヴィア(東京大学大学院 法学政治学研究所)
・変更の可能性あり。詳細はホームページ(<http://oncolocafe.com>) またはメール(info@oncolocafe.com)、電話(090-3714-7970/「新薬と臨牀」を見てお伝えください)でご確認ください。

★この春から「医療者限定おんころカフェ」を開催、「出張カフェ」も受付中★

おんころカフェでは医療者の要望を受け、今年3月から医療者限定のカフェを開催(5月以降毎月開催予定)。出張カフェの相談も受け付けています。

- ・医療者限定カフェ: 参加者を医療者に限定したカフェ。月に1回の予定で開催(詳細は上記HP、メール、電話でご確認ください)。
- ・出張カフェ: 落ち着いて対話ができる会場をご用意いただければ進行役の哲学対話コーディネーターがお伺いします。日程についてはメールまたは電話でご相談ください(費用: 交通費 + α(応相談))。

■おんころカフェ研究会とは…■

おんころカフェではミニレクチャーや座談会と対話を組み合わせた「おんころカフェ研究会」を年に数回開催しています。一般の方々にカフェのコンセプトを理解してもらうことを目的としており、どなたでも参加可能です(予約不要・参加費無料、詳細はHPへ)。



ミニレクチャーはがん治療の専門医を含む医師、臨床心理士、おんころカフェ主催者などによって行われ、これまでに「終末期がん患者が望むこと」「『エビデンス』ってなんだろう? ~意思決定における役割について考える」「おんころカフェでできること」などといったテーマで開催されました(写真は2月に開催された第4回おんころカフェ研究会の様子)。

“対話”が生むカーカフェという支援のかたち